

記 事

例会記録

日本医史学会 11 月例会

平成 29 年 11 月 25 日(土)

順天堂大学 10 号館 1 階 105 カンファレンスルーム

シンポジウム：わたしはなぜ医学史・医療史を
まなぶのか

- 1. 行動しながらの医療史
——精神科医として—— 岡田靖雄
- 2. 複合領域としての医療史・医学史・科学史
月澤美代子
- 3. 臨床医学と社会医学の接点
——予防接種史を中心に—— 渡部幹夫
- 4. 医学史・医療史と公衆衛生
——マキューン・テーゼから歴史人口学へ——
逢見憲一

2. シソの古典的記述から

日本薬史学会：伊藤美千穂

3. 犬の狂犬病頭数の消長と撲滅までの社会的要因
分析 日本獣医史学会：唐仁原景昭

4. 西東三鬼と平畑静塔らの戦争俳句
——治安維持法との関わりについて

日本歯科医史学会：北野元生

5. 陸軍看護制度の成立過程

～橋本綱常の上申を中心に～

日本看護歴史学会：鈴木紀子

6. 自筆資料からみる曲直瀬道三の医学と医療

日本医史学会：町泉寿郎

日本医史学会 1 月例会 平成 30 年 1 月 27 日(土)

順天堂大学 10 号館 105

日本医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・
日本歯科医史学会・日本看護歴史学会・洋学史学
会 合同 12 月例会 平成 29 年 12 月 16 日(土)
順天堂大学 10 号館 1 階 105

- 1. ガレノスの生涯とその時代 澤井 直
- 2. あの闘争はなんだったのか
——ぼくの場合—— 岡田靖雄

- 1. シーボルト事件で罰せられた三通詞
洋学史学会：片桐一男

例会抄録

『神農本草経集注』と『新修本草』

——苦菜をめぐる両者のスタンスについて——

岩間真知子

はじめに

茶は、唐の『新修本草』で初めて本草書に取り
上げられたとされてきた。しかし宋の『太平御覧』
には、『新修本草』以前の文献と考えられる『桐
君録』などに茶の記事がある。茶は、『新修本草』

で初めて登場したとして良いのだろうか。

新修本草

中国初の勅撰本草『新修本草』は、陶弘景によ
る『神農本草経集注(以下、本草集注と略称)』

(500年頃)を増補改訂し、顯慶4年(659)に成立した『新修本草』の古写本には敦煌出土本や仁和寺本などがあるが、そこに茶の記事は見えない。別に天保13年に医官・小島宝素らが書写した『新修本草』巻13, 14, 18, 20の巻13に茶の記事が見える。宝素らが書写した4巻の原本は仁和寺旧蔵と記されるが、当時の所在場所は明示されず、その後所在不明となった。岡西為人氏はこの4巻を他の仁和寺本と比べると感じに相違がある、とする(『重輯新修本草』概論 p.163)。だが、真柳誠氏は「この4巻の原本は、京都の典医・福井榕亭・楝園のところにあった仁和寺旧蔵本で、仁和寺は皇室とゆかりがあるため、宝素は遠慮して福井家所蔵と明示できなかった。原本不明の現在、その旧態を最もよく伝えるものは台北故宮の宝素影鈔本である」という(『黄帝医籍研究』汲古書院 2014年)。

宝素が書写した『新修本草』は、茶を「茗苦椽」と表記する。宋の『証類本草』は唐の『新修本草』を収録する際、「茗苦椽」と草冠を付した「椽」に文字を変えた。だが『新修本草』は茶を草ではなく木と主張するため「椽」文字こそ、その趣旨に合う。更に唐の陸羽による最古の茶書『茶経』(761年ころ)は、『新修本草』に木偏の茶文字、つまり「椽」があったとする。その表現通りの「椽」字を残す宝素写本の価値は高い。

次に『新修本草』が掲げる茶産地は北の陝西省2か所のみで、良質な茶産地でもなく、産地数も少ない。『新修本草』の主たる著者・蘇敬は、荆襄間(湖北省)の人(『政和本草』巻20「蜀州蜜」)で、右監門府の長史として都・長安にいたため、揚子江流域に良質の産地の多い茶を十分には知らなかったのだろう。右監門府は、宮中に貢献されるものを、『本草集注』に照らして、実物を見て名前と状態、産出地を監査する役であったという(岩本篤志『唐代の医薬書と敦煌文献』144頁)。すると『新修本草』に茶の情報が乏しかったのは、同書成立の659年以前には茶が揚子江流域から皇帝に貢献されなかったと推定される。確かに浙江省長興からの貢茶の開始は、766年ころ(『義興県重修茶舎記』)である。

唐の『新修本草』は茶を本草書に初出と記し、宋代以降の歴代主要本草書、明の『本草綱目』、現代の研究書もそう見なしてきた。しかし岡西為人氏は、『太平御覧』に茶を記す古文献があるため「茗」は『神農本草経』所載薬ではなかったかとした。(「神農本草経所載の薬品について」『中国医籍本草考』p.366-368)

『神農本草経集注(本草集注)』

『本草集注』は、陶弘景(456~536)が500年ころ、伝存していた4巻本『神農本草経』の薬と文に、それ以後に名医たちが選んだ薬と文(『名医別録』)を副え、自注を加えて編んだ本草書である。陶弘景は実際に『神農本草経』を見て著作し、内容を伝えた人でもある。その『本草集注』に、従来、茶が記されているとは認識されていなかった。

ところが敦煌出土の隋末唐初の写本『本草集注』序録(龍谷大学蔵)に、「茶茗」とあった。茶茗とは、東晋の郭璞(276-324)が『爾雅』注で、「早く採る者は茶と為し、晩に取る者は茗と為す」と記すように、早晩いずれの時期であれ採った茶葉を表す。唐の『茶経』は「茶茗」と記す古文献(『神農食経』『異苑』など)を収録する。現伝の『茶経』は宋以降の版本のため「茶茗」となっているが、古くは「茶名」で茶を表現したと推定される。

『本草集注』序録は後代の本草書である宋の『証類本草』や明の『本草綱目』にも収録され、そこにも「茶茗」は記されていた。だが敦煌本が出現するまで宋の『証類本草』の当該部分が、陶弘景の『本草集注』序録を基にしていることは分りにくかった(渡辺幸三「陶弘景の本草に対する文献学的考察」『本草経の研究』9頁)、そのため認知されなかったのかもしれない。

さて『本草集注』序録の「茶茗」は「好眠」の治療薬に挙げられ、眠りを醒ます薬効が認められていた。『本草集注』では、『神農本草経』所載薬は朱書、『名医別録』所載薬は墨書する。墨書の「茶茗」は『名医別録』所載薬である。『名医別録』(3~4世紀)とは『桐君(採薬)録』、呉普、張仲

景、『葛氏方』の書などから薬と文を採録したもののだが、「茶茗」の具体的な出典は何だろうか。

平安時代の医書『医心方』巻第13の「治嗜眠喜睡方（嗜眠症の処方）」は、『葛氏方』の処方を収録する。その処方の薬剤は『本草集注』序録の「好眠」の治療薬と同じである。そこで陶弘景は『葛氏方』から嗜眠症の薬を採録し、好眠の治療薬としたと推察される。『本草集注』序録の「茶茗」の出典は、4世紀の『葛氏方』であろう。

次に『本草集注』の本文を、『本草集注』の復元稿本（小島尚真、森立之らによる。岡西為人旧蔵・京大人文研蔵）で見ると、巻七「苦菜」の陶弘景の注に茶の記事があった。陶弘景は「苦菜」（『本草集注』収録『神農本草経』の薬）に、次のような注を加えた。

- （問題提起）『神農本草経』の薬「苦菜」は、茗ではないか
- （理由）（1）名称 苦菜も茗も「茶」という。（2）効能 どちらも人を眠らせない。（3）植物特性 両者とも冬枯れない。
- （傍証）『神農本草経』と同時代の『桐君薬録』の「苦菜」の記事を例として引用。
- （結論）『神農本草経』の「苦菜」は、茗に似る。以下に陶弘景時代の茶の様相を活写。

漢代に茶文字は無く、そのため陶弘景は『神農本草経』が「苦菜」で茶を表したと考え、『神農本草経』と同じ漢代の『桐君薬録』「苦菜」の文を引用し、苦菜と茶の共通点を挙げて論証し、続けて陶弘景当時の茶の様相を活写した。

ところが唐の『新修本草』は茶は木類であり「菜」ではないとして、『神農本草経』の薬「苦菜」を茶とする陶弘景の意見に反論する。そのために、『茶経』より260年も前に、陶弘景が書き残した『本草集注』にある茶の史料は千年以上も見過ごされてきてしまったのである。

まとめ

『新修本草』（659年）は「茗苦楮」として、本草書で初めて茶を採録したとされてきたが、さらに古い『本草集注』序録（500年頃）に好眠の治療薬「茶茗」として、茶が記録されていた。その「茶茗」は、4世紀の『葛氏方』（『医心方』収録）から採録したと考えられる。

陶弘景は『本草集注』で『神農本草経』（1～2世紀）の薬「苦菜」を茗（茶）と論証し、続けて当時の茶の様相を活写していた。それは『新修本草』の茶の記事より、160年も古く、また詳細であった。

（平成29年10月例会）

『杉田玄白評論集』の出版について

片桐 一男

「蘭学」創始の一人・杉田玄白の病没は文化14年（1817）4月17日である。2017年は、その没後200年に当たる。

オランダの解剖書『ターヘル・アナトミア』を解説するための会読に努め、その成果『解体新書』を公刊するまでの杉田玄白は、オランダ語を初歩から学び初め、オランダ語の訳出に打ち込む書齋に坐す学究の徒であった。しかし、刊行後の玄白は、その態度をがらりと変えた。

- 1 鳴りやまぬ漢方医たちの攻勢
- 2 周りの医師たちの妬み
- 3 家学の維持・発展
- 4 新学問「蘭学」の堅実な進展

玄白にふりかかるこの四つの命題に対抗し、立ち向かってゆくために、世間に目を向け、世界の進運のなかで日本および日本人の進路を熟考する必要に迫られ、決断と行動の人となっていった。置かれた時代の、置かれた社会環境にあって、